

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2022 年 9 月 103号

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com

http://keaf-japan.com



「大きな支援」は届かない だからありがたかった

コロナ禍の中、急速な社会変化

金子 敦郎

7月～8月の8日間の日程でカンボジアの支援学校を訪問。KEAF活動の終わりの日が迫っていることを伝え、最後となる支援に何を望むかを聞くという役目を果たしてきました。校長先生たちからは一様に「長いこと本当にありがとう」というお礼の言葉と、盛りだくさんの支援要望のリストをもらって帰ってきました（中央の写真：衣替えしたプノンペンの中央市場）。

同じ言葉でお礼

「私たちはそれぞれひと仕事を終えた仲間が何かできることをしようと集まったグループなので、政府機関や大きな基金とは違ってささやかな支援しかできなかったと思います。でも、いつの間にか10年が過ぎ、スタッフ

も支援者もほとんど80歳を超えてしまい、みなさんのお付き合いも長いものになりました。この2年余りはコロナ禍で生活のリズムを崩されて、残念ながら、支援活動の終わりを早めさせられてしまいました」

私がこう話すと、どこでも同じような言葉が返ってきました。「大きな支援」の手が届かないところへの支援だからありがたかったのですと。

地域の教育への関心高まった

具体的に上げられたのが、次のような支援でした。ノートや鉛筆・ボールペン、色鉛筆やクレヨ

ンは低学年の生徒たちにはとても喜ばれたといいます。教図書室用の絵本や読みもの、辞書などもよかったそうです。

ほかに教科書が足りなかった時の教科書支援、サッカーボールやネット、ユニフォームなどのスポーツ支援やサッカー教室、さらに奨学金などがあげられました。

地域への人道的支援という言葉を使った校長さんも何人かいました。KEAFの支援が生徒たちの向学心を刺激してくれて、学校全体からさらに地域に教育への関心を高めるのに大きな貢献をしたという、ありがたいお礼ももらいました。

後継者はいないの？

痛いところを突かれることが確か2回ありました。みなさんの跡継ぎはいないのですかと。これは私たちの支援をもっと続けてほしいと言ったのだ

と思います。私にも子どもがいますが、今は自分の仕事と家族の生活に精いっぱいですけど、親父がやっていたことは見ていると思いますと、苦しい答えをしました。



重たい「最後の要望」

「最後の支援に何が欲しいですか」。先生たちは待ち構えていたように用意していた「支援品リスト」を取り出しました。支援要望を聴くのはいつものことですが、今回のリストは2頁や3頁に及ぶ学校が多数でした。

中高一貫校と1養護施設の計13の支援先からの要望物品はこれまで通りに教材や学用品は中心ですが、ボールやユニフォームといったスポーツ用具がこれまでになく目立っています。可能な限り要望に応えるよう、準備に入っています。（「コロナ禍の中、急激な社会変化」については4頁に）

態勢の立て直しに苦慮

支援要請、新たな段階に

池内 秀樹

コロナ禍第7波に追い立てられるように出国し、意外とマスク姿が少ないカンボジアを7月31日から～8月7日まで訪問してきました。旅券を見ると、前回は2019年6月30日から7月7日までの出入国記録となっていたので、個人的には、丸3年ぶりの訪問です。KEAF（カンボジア教育支援基金）としては、その年の秋、11月3日から8日まで、岡宮喜雄さん、久保田信一さんの2人が奨学金支給と文房具・教材を届けたのが最後でしたので、2年8か月ぶりの現地訪問となりました。



写真：プレイヴェン州都にあるプレアンドウン高校。KEAF 支援校中で最も整備されたキャンパス。

深紅のブーゲンビリアやカンボジアの桜と言われるグアバの花が満開のこの雨期の季節のカンボジアは青空の下、コロナ禍から脱出しつつあるような明るさが感じられました。しかし、3年前の今頃、プレイヴェン州内の KEAF 対象校の4高校に進学予定、あるいは進学して勉強を続けていた子どもたちは全員がすでに卒業してしまっており、当時の上級生にしか奨学金を手渡すことができなかったことが嫌でも思い出され、あらためて、非常に残念な想いが募りました。

道路はよくなったが

この3年間、僻地にある学校周辺の道路はかなり整備が進み、通学の便もよくなっている印象でした。3年前はあまりのこぼこ道で車が通れないため、村人の運転するオートバイの後ろに乗



写真：プノンペン市中心部とトンレサップ川対岸を結ぶ日本橋。戦争中にクメール・ルージュのゲリラに一部破壊されたが修復。交通渋滞がひどくなり数キロメートル上流に「中国橋」が建造された。

せてもらって行ったプレイトープ中・高校へも、今回は車で行くことができました。ベトナム国境に近いスヴァイリエン州チョーチアル中学校へも格段にアクセスはよくなっていましたが、近くのアンサー小学校へは車では行けず、校長先生にはチョーチアル中学校まで来てもらいました。

チョーチアル中のオーン・サリエム校長は「雨期はまだ大変」といいます。同校を卒業して高校の近くに下宿するのではなく、10^{km}近く離れた高校に自転車を通う子どもが今もいるそうですが、これでは雨期はやはり通学の苦労が続いているようでした。しかし土埃もあまり目につかず、蚊やハエもいなくなっていて、表向き、生活の基盤が少しずつながら向上してきているのは確かなようでした。

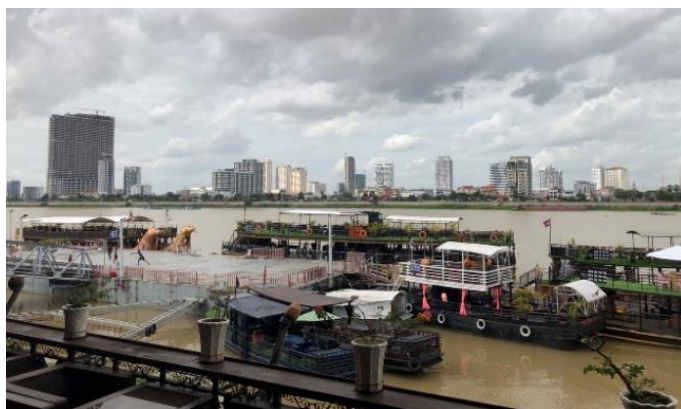
教育態勢の立て直しに苦慮

支援対象校の校長先生たちはいずれも「(コロナ禍を乗り切って) 平常に戻った」と言っていますが、3年間は「学校ではなく、村内で(分散して) 授業を継続し、生徒についてきてくれるよう努力したが、授業への参加生徒数や質が下がってしまった」(プラティアート中・高校)、「閉校していた時期があり、成績のレベルが落ちているが、今は毎月のテストで学力向上に努めている」(タッコー高校)、「閉校中に親とともに出稼ぎに出て戻ってこない生徒がかなりいる。オンラインの授業も取り入れてきたが、インターネット環境は整っていない。進学のための国家試験の合格率は70～80%。だが、進学するかどうかは不明で、

進学率は下がっている」(プレイトープ中学校)という具合で、中・高校の教育立て直しに苦慮していることがうかがわれました。

そのなかでも、スヴァイリエン州のチョーチアル中学校は、コロナ禍のさなか、校庭でニワトリを飼ったりして生徒たちの学費の一助にしたり、教育省のプログラムを積極的に取り入れて1学期1回の試験を毎月実施して学力向上に努めたりして、州内のモデル校的な存在となっていました。

新築校舎が完成していたプレアンドウン、プロモルプロム、コンポントラバイの各高校がある一方、教室が足りないというバンティチャクライ中学校もあり、教育レベルの回復だけでなく、引き続き、教える場の整備という基本的な課題も解決への途上にあるのが現状でした。



流入に伴って、当然のように中国人が増えているのだそうです。政府庁舎の真裏にも高層ビルがのしかかるように建設されていました。トンレサップ川沿いにある王宮やその周囲の寺院、フランス植民地時代の旧市街に、静かでゆったりと時が流れるような、半世紀前のプノンペンの面影が辛うじて残るのみでした。

郊外の湿地帯を埋め立て広大な空き地のあちこちで巨大ビルの建設が始まり、プノンペンの新空港の予定地への一本道路がその空き地を貫いて、トラックが行き来していました。この道路は

フン・セン道路とも呼ばれています。

写真はプノンペンの「摩天楼」風景です。トンレサップ川沿いに林立する高層ビル群。中にはコロナの影響で建設ストップになっているものも多いそうです。手前はフェリー発着所。

・・・・・・・・・・・・・・・・

あらたな支援要請の段階に

今回の訪問で、「スポーツ用品が足りない」という学校がプレアンドウン校など3校もありました。前身のCEAF時代の17年前に校舎建設から始めたKEAFの支援は、その後、不足している教科書の提供、さらに文房具や教材の提供を進めてきたという経緯があるのですが、コロナ禍のなかでも3校の要請が「運動用ユニフォーム」「スポーツ用具」の提供を求めるという段階が到来したことを見ると、これまでの支援が一定のレベルに達し、次の段階の入り口に立っているのではないか、と思われました。

高層ビル、続々と

首都プノンペンの変わり方はかなり激しいものでした。中国資本の高層ビルが次々と完成し、3年前に比べ街の景観が一見、近代的になりました。これらの高層ビルは事務所などの多目的の階層もありますが、高層部分のほとんどは住居で、入居者は圧倒的に中国人のようです。中国資本の

「フン・センの国」

1979年1月、ベトナム軍の支援で成立したヘン・サムリン政権下で徐々に地歩を固めたフン・セン首相は、93年のカンボジア王国復活から数えれば29年、その前の内戦時代からなら事実上、40年以上、カンボジアの権力を握り続け、野党の存在を認めず、独裁色を強化してきています。

中国一辺倒のその政治姿勢は、ASEAN(東南アジア諸国連合)のなかでも極めて異色です。昨年、後継者に長男のフン・マネット中将(陸軍司令官)を指名し、われわれのプノンペン訪問の直前には、憲法の改定を進め、後継体制を法的にも整えつつありますが、まだあと10年は首相の座を譲らないとされています。

中国との結び付きは一層、強くなる、と思われます。プレイヴェン州の田舎に住む中高生のほとんどはプノンペン自体を見たことがないので、彼らがこの先プノンペンを訪れる機会が来たら、外国に来たと、思うのではないのでしょうか。

ありがとうございました

(2022 年 3 月 1 日～2022 年 4 月 30 日)

年会費、寄付金、奨学金をお振込み頂きました方々に厚くお礼を申し上げます(敬称略させていただきます)

■■■■ (神奈川) ■■■■ (大阪) ■■■■ (愛知)
■■■■ (埼玉) ■■■■ (東京)

.....

学用品支援

ありがとうございました

■■■■ 様 (東京): ノート、手帳、ボールペンなど
学用品多数(中型ダンボール箱一杯、2022 年 8 月)

(「現地訪問報告—金子」1 頁からの続き「コロナ禍の中、急激な社会変化」について)

一気に進む少子化と「スマフォ化」

コロナ禍の中で大きな社会的な変化が起きていることが分かりました。最後の訪問校になったプレイトープ小・中学校で聞いた 2 つの話です。

この地域では最近の若い家庭の子どもは 2 人が普通で、3 人以上は少ないというのです。KEAF の支援はプロモルプロム高校生への奨学金給付から始まりました。初めのころ奨学生面接で家族構成を聞くと、兄弟姉妹、8 人が普通、10 人も珍しくありませんでした。

その後、年々数が減って 5～6 人という答えが多くなっていたのですが、それが一気に、2～3 人にまで減っていたとは驚きでした。



もう一つは中学生のスマフォ所持率がほぼ 100%になったというのです。

同中学校の副校長さんは、古い世代と違って若い夫婦は子育てを大事にするようになってきているからだと言

びっくり残念ですが

きちんと終わることも大事ですね

こんにちは。

お便りが届かないことから下の住所変更はしているけれど、メール便だとお知らせしていないためとわかり、お知らせしなくては、と思いつつ失念しておりました。お便りは Web にて拝見しております。

このたび活動を終えられるとのこと。びっくり残念に思っていますがきちんと終わることもまた大事なことです。長い間ありがとうございました。私は第 1 回目のツアーに申し込んでいて。直前に母の認知症が発覚してそれに対処するためにキャンセルしたものです。母はその後いろいろあった末に幸い特養に入所しました。丁度その頃からのコロナの感染拡大、ようやく旅に出ることができた頃でした。皆様とご一緒できる機会がなかったことが本当に残念です。

終了を前にわざわざお知らせする必要があるのかどうか少し悩みましたが感謝をお伝えしたくお便りしました。行先不明となったと思われるレターの再送は不要です。Web で読んでおりますので。末尾ですが皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

長年の会員

富山市 ■■■■ さん からのお便りです

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています

.....

いました。カンボジアの農村も日本や欧米とそんなに変わらない社会へと向かい始めているのでしょうか。話が續いてそれ以上聞けずに終わってしまいました。

同小・中校のある地域はプレイヴェン州南東のはずれで、ベトナム国境に近いところ。道路整備が一番遅れていて、今回訪問でやっと車で行けるようになりました。農村ではどこでも同じような変化が起きているとみていいのではないかと思います。

左段の写真は 2013 年にプロモルプロム小学校に図書室ができ大喜びで絵本を読んでいる生徒たちのショットです。

お断り:『カンボジア通信』は 4 半期ごとに発行してきましたが、7～8 月により早く現地訪問ができそうになり準備に入ったので、訪問報告を掲載するために 6 月発行がずれ込みました。